

# 小学校におけるスクールカウンセラー活動の 取り組みについて

—学校と家族の連携の必要性とその可能性について—

## School Counselor Activity in An Elementary School

—Necessity and Possibility of Cooperation Between an  
Elementary School and the Family of a Student—

中野明人

### 1. はじめに

筆者は平成16年4月より2年間、スクールカウンセラーとして長崎県の北部にあるA中学校を拠点にB小学校にも勤務した。このスクールカウンセラー活動においては、筆者が勤務する長崎短期大学における学生相談の経験が多分に生かした半面、小中学校という全くこれまでと違った環境面において戸惑いや新しい発見を見出した2年間でもあった。

本来、スクールカウンセラー事業は、中学校を主たる対象としているのであるが、地域によっては小学校と併用する「拠点校方式」<sup>1)</sup>を採用するケースもあり、筆者の場合はその拠点校方式に基づく活動となった。

勤務形態は、週2日(火・木)4時間(13:00~17:00)ずつの合計8時間勤務となるが、そのうち木曜日の午後15時~17時までを小学校の勤務に割り当てた。小学校の場合、担任教諭の時間が15時以降のほうがとりやすいこと、また、職員会議などにも参加できたり、PTAなどの集会にも参加しやすいということで、週2日のうち、15時以降の時間を割り当てた。

平成16年度は、中学校を基本とし、要請があれば小学校に出向くという形でスタートしたこともあり、小学校に出向くケースが、予想した以上に少なかった。長期休暇中の研修会に招かれたり、生活指導の勉強会に参加したことはあったが単発での取り組みだったので、今年は、なるべく毎週小学校に出向くことを心がけた。

---

1) スクールカウンセラーの設置方法としては、1人のスクールカウンセラーが1校を担当する「単独校方式」と、2校を担当する「拠点校方式」がある。基本は、中学校の単独校配置にあるが、長崎県の場合、公立の高校や、公立の小学校もスクールカウンセラー事業の対象としている。高校の場合、単独校方式をとることが多いのであるが、小学校の場合は、拠点校方式による中学校との併用となる。

## 2. 小学校におけるスクールカウンセラーの取り組み

小学校における取り組みの中心は、教員に対するコンサルテーションであった。主として不登校や登校をしぶる生徒に対する関わり方、また、保護者に対する接し方、気になる生徒に対する見立てと具体的なかかわり方など、さまざまな相談を受けた。

カウンセリングについては、直接児童に対して行うというよりは、その保護者の面接を行うケースのほうが多かった。中学校におけるカウンセリングとの大きな違いはそこにあり、自発的な相談が多くは望めない状況において、いかにカウンセリングの効果を高めるかということが課題となった。検討した結果、小学校の現場においては、第一に、保護者に対する相談活動を活発化することを目的とし、また継続して教員に対するコンサルテーションを充実することを主眼として活動することとなった。

特に、小学生の場合、保護者である父親や母親また他の家族がこどもに与える影響は小さくないと考え、保護者にカウンセリングすることによって、結果的に生徒に好影響を与えることを期待して取り組んだ。

実際の相談の場面においては、相談を希望する保護者は多くはなかったので、担任や教頭先生などを通じて、気になる生徒の保護者に面談をすすめてもらうことで、カウンセリングに至ったケースが多かった。

## 3. 家庭と学校の連携

これまでも、子どもたちの問題行動を解決するためには、家庭と学校の連携が必要であるという主張はさまざまな現場で耳にしてきた。子どもたちはその生活の大半を学校か家庭かのどちらかで過ごすのであるから、問題行動が発生した場合、その原因を家庭か学校に求め、その問題の解決のために両者が連携をしたほうが良いと考えるのは当然のこととして理解されてきた。

しかしながら、実際の現場で家庭と学校が連携をすることが容易かということ、「そうではない」という返事が返ってくるのが少なくない。亀口<sup>2)</sup>は、「連携を推進するつもりと言動が理解されず、むしろ逆に非難の対象とされかねない。それよりは、肩入れする側を明確にするほうがはるかに支持を得やすい。へたに連携推進者になってしまうと、いずれの側からも支援を得られず、結局、孤立状態に追い込まれる危険性が高い。～、多少とも先の読める人物は本気で連携を推進するよりも、建て前として見栄えのよいスローガンにとどめておくに違いない。」と指摘しているが、実情としてはこの指摘と大きく変わらない。事実、スクールカウンセラーとして教師から相談を受ける内容の中で最も多いのが、「保護者とどう接したらいいか？」という相談であったことから、教師が家庭と連携を取ることに困難さを感じていることがわかる。目の前の子どもに苦慮しながら、また、その向こう側にいる保護者に接することにも悪戦苦闘くらいであれば、なるべく避けたい、そう考えるのも無理からぬ実情がある。

連携を取るに際して、一番大切なことは両者の信頼関係をどう構築するかということであるが、SC がその学校に配属された段階ですでにその信頼関係がなく学校が対応に苦慮する場合も存在し

2) 亀口憲治 放送大学大学院教材『家族心理学特論』2002 P52

た。その場合、かえって、第三者的な立場の SC が中立的に関わることで、両者の橋渡しをし、結果として生徒の改善につながったケースも少なくなかった。学校も家庭も、「目の前にいる子ども」を良くしたいと願うことについては、目指すベクトルは同じなのであるが、なかなかお互いが対立的な視点から抜け出せないことが多い。まずは、ことばを十分に伝えることで、十分なコミュニケーションをとるだけで、ほとんどの誤解が解決することがわかった。人づて、あるいは、ことば不足の電話や連絡帳では、お互いの真意が伝わりにくいのであるが、そこを埋めるための努力・工夫がわずらわしいと感じることで、溝としてはっきりと亀裂が入る。

SC はその溝をまず最初に自分でうめて、学校と家庭が同じ土俵にのれる環境作りをする大切な役目であり、同じ土俵にたった場合、お互いがわかりあえるために話をする際には、解釈や翻訳をしてあげることで、相互の誤解がとけることになる。あとは、自浄作用で信頼関係を再構築することにつながる。お互いが本来持っている力をベースに、「子どもをよくしよう」という思いが1つになれば、問題解決の流れに乗れることにつながる。

しかし、一方で保護者が子どものほうをきちんと向いていないケースもある。事実、筆者が保護者と接した中で、「子どものことは先生に任せます。どんなことをしてもいいので先生にやりやすいように指導してください。」などということばを耳にしたのであるが、これは結果として家庭が子どもを見放したことを意味している。「子どものやりたいようにさせたい。」「子どもがしたことですから子どもに責任を取らせません。」ことばの響きは悪くないのであるが、そこに保護者の責任転嫁や無責任さが存在するし、そのことについては、子どもたちも気づいている。感受性の強い子どもほど、自分の親の言動から、自分のことをちゃんと見てくれていないということを感じ取っている。そしてちゃんと見てほしいがためにいろんな形でメッセージとしていろんな問題行動として表している。不登校やいじめにかぎらず、家庭内暴力、非行、拒食症など子どもの問題の表れ方は異なっても、問題発生のメカニズムの基本は同じである。

子どもに対して愛着はあっても愛情を持ちえない親たちは、自己の所有物として子どもを捉え、子どもを支配(コントロール)したいという思う。そもそもその親子関係においては、コミュニケーションそのものが成立していない。所有物には意思がないからだと思えば、子どもに自分の考えや気持ちがあることに気づかなかったり、気づいても認めないことになる。「いいこ」とは、大人にとって都合のいい子どもであり、そこには支配する・支配される関係だけが強調される。支配された子どもの叫びが、不登校や、いじめ、非行などの問題行動として社会問題化しているように思われる。その叫びは、保護者だけでなく、教師も、SCも、他の友人も、いわば社会が気づいてあげなければならぬのであり、そこに今の子どもたちをめぐる問題の根本的な原因が存在すると思われる。

今回はその中でも親子面接を通して、生徒とその保護者が大きく変わった1事例を報告する。

親子カウンセリングをすることで、短期間で改善をしめたケースであるが、今後、小学校においてスクールカウンセリングをするにあたって1つの大きな柱になったケースでもある。

#### 4. 事 例

(ア)クライアント：A (小学校5年生)

家族：父、母B、兄(中1)、弟(小1)、祖父、祖母

関係する人：担任C(女性)、養護教諭(女性)

(イ)来談の経路 小学校の2年生のときから、目が見えない、耳が聞こえないという訴えが本人より

担任および養護教諭にある。小2の健康診断における視力検査では、1年次にAランクだったものが、一気にDランクに落ちていた。その際、大きな病院で検査をしたところ原因がわからず、「心因性のものではないか」といわれ、その後も1, 2回受診をしたが、医師との信頼関係に不満をいだき、そのまま受診しないでいた。小3では、特に受診もせず、小4で近くの眼科を受診したところ、そこでも「心因性のものではないか。この子はそういう子なんですよ。」といわれ、母親が大きなショックを受け、その後受診しないで、今回の相談に至る。担任は、そういった経緯も知ってはいたが、その女兒が嘘をつくことが気になっており、それが原因で人間関係がこじれていることを重く見て、SCに相談する。

(ウ)主 訴 目が見えない、耳が聞こえにくい。めがねをかけたい。

(エ)面接の経過

① 初回面接 (H17.7) 母親と実施する。以下「 」は母親のことば。〈 〉は SC のことば。

最初、お母様は思い当たるふしがないという感じの応答だったが、次第に、「そういえば……」という形で、これまでの子どもに対する接し方について、振り返りができるようになる。「Aの上と下に、兄弟がおり、現実の生活においては、ほとんどその上と下の兄弟の世話に追われている。」「A自身は、幼少時長期の入院の経験があり、今のように元気になるまでは、A中心で生活をしてきた。」「最近では、ほとんど手がかからない。何でも自分でしてくれており、そのぶんあまり接する時間がなかったのかもしれない。」「難聴とか言われて、近隣および遠くの病院を受診したが、はっきりとした原因はみあたらず、『心因性のものではないか』『そんなこども(※心に悩みを抱えたこどもだと母親は解釈していました)なんでしょ』などと投げやりな感じの返事しかなく、親としても不安で仕方なかった。」「そういえば、Aは病院に行きたがるようなところがあって、Aに言われて病院に行くときは、二人きりになるので、体をべったりとくっつけるようにして甘えるような感じで接してくる。」「ついつい、子どもの気持ちを無視して、何でも今まで私(B)がAに指示するような感じで接してしまい、コミュニケーションらしいものがなかった。」と、時折泣きながら話してくれた。

SCとしては、「専門医での受診の結果、大きな原因が見当たらないので、聴力や視力の面からの病気はあまり推察しにくいですが、それでも心配になる場合は、さらに別の大きな専門医を受診すること自体は決して悪いことではない。」という提案をした。母親はSCに「先生、治りますかね?」と心配そうに尋ねたが、「私ができることは限られており、病気そのものを治すということについては、医師ではないので『治ります』とはいえませんが、少しずつ改善するための環境作りについては、お母様を中心にご家族そして本人と話をしながら、時間をかけて一緒に考えてみたいと思います。」と伝えた。一見突き放すように聞こえたのではないかとSCは気になったが、Bは「わかりました。じゃあ私はどんなふうにも娘と接していったらいいんでしょうね?」と具体的に自分の方向性をさぐる質問をしてきたので、いくつか具体的に提案をした。〈接し方としては、Aが普通に過ごしているとき、『どう?耳が聞こえにくいこととかない?』『お母さんは、耳が聞こえにくいって聞いて心配なんだよ。』などと、お母様からのコミュニケーションを徐々に増やしてみたらどうでしょうか?その際、腫れ物にさわるように、耳や目の問題を避ける必要はなく、さらりと、心配してるんだよというメッセージを伝えてみるといいと思いますよ。こどもにとって、自分が心配されているって感じることはとても安心しますし、うれしいと感じると思いますよ。〉〈必要であれば、SCが直接Aと面接をした上で、再度お母様の面談を実施してもいいですよ。〉と伝える。

\*聴力や視力について受診において大きな原因が見当たらないにも関わらず、このような結果になってしまうことについては、Aが何らかのメッセージを「意識的」あるいは「無意識的」に出しているのではないかと思うので、次回の女児の面接でそのメッセージの意味をさぐっていきたいと考えた。

\*母親自身が一番大きな原因ではないかと感じていたのが、家庭内でのコミュニケーションの問題であった。何でも一人でできるので、ほとんどコミュニケーションらしいものがない、あっても、それはお母様からの一方的な指示のようなものであり、コミュニケーションにまで至っていないというところまでは自分自身で振り返ることができた。

\*本人はいろいろと心配してほしいと思っているにもかかわらず、直接それについて心配する素振りもなく、また家の中では兄と弟が母親を独占してしまい、自分の思いも伝えられずに、随分困っていたのではないかと感じた。その困ったような思いを伝えるために、一種の「退行」現象に至っているのではないかと推察した。CLが自分が一番心地よかった頃を思い出して、それを求めるということは、そのための方法論を考えなければならず、Aの場合は、病気になるということでメッセージとして送り出しているのではないかという仮説になった。まずは、可能な範囲で、意識的にAに接する時間を増やしたり、コミュニケーションを増やし、言葉だけでなく、体のふれあい、あるいは買い物などのちょっとした日常の機会を利用して、Aの気持ちを受容できる環境作りをしていくことが大切であり、そのために児童だけでなく母親の面談も継続することが大事ではないかと担任Cに提案する。ただし、今回はCLではなく母親の面接を行ったので、次回のCLの面接を踏まえて再度方向性を確認することとする。

- ② 2回目面談 (H17.9) CLのAと面接を実施する。以下「」はAのことば、〈〉はSCのことば。『』はその他の人のことば。

〈今日はよく来てくれましたね。ちょっと緊張してない?〉「大丈夫 (笑顔でうなずく)。」

〈じゃあせっかくの昼休みの時間だから、大切にに使わせてもらいますね。〉〈今一番困っていることって何?〉

「今一番困っているのは小さな字が、前にいるけど見えにくいこと。前までかすかに見えていたものが、全く見えないこともある。」「先生が、(Aのために)読み上げながら黒板に書いてくれるときは大丈夫だけど、言わないで書いたときは、大事なところを抜かしたりして困るときがある。」「1年生まではAAだったのが、2年生からDDになって、最近はメガネをかけたほうが良いといわれている。」〈そうなの?目が見えないと困るよね。先生も目が悪くて、めがねはずしたら全然見えないから、何となくわかるなあ。先生はお風呂に入るとき、よく、どこにめがね置いたかわからなくなって慌てるんだよ。〉という「えーっ」と小さく笑う。「目は、別に見えればいいけど、今は見えないから不便。」〈じゃあ学校だけじゃなくて、おうちでとか、普段の生活で何か困ったことはない?〉「階段がまっすぐ見えるときがある、坂道みたいに。」〈そうなんだ。でこぼこがなかなかわかりにくい感じなんだ?〉「うん。」〈病院とか行ってるの?〉「病院では、視力が回復したら治るといわれた。」〈お父さんやお母さん心配してるんじゃない?〉「お父さんとお母さんは心配してると思うけど、それほど心配していない。」〈そう?でも目が見えないって不安じゃない?〉「急に見えなくなったから不安といえば不安だけど、メガネをかけられるかどうかの方が気になり。」〈目の診察だけど、病院とかいやじゃない?〉「病院に行くのはいやじゃない。注射が好き。前病気で入院していたとき、毎日注射してたから。蜂に刺されるのもいやじゃない、毒がなければ。」この話を聞いて、SCは少し内容に疑問をもつ。病院が嫌いじゃないという

ことまではわかるが、蜂に刺されるのが好きというのは話が飛躍しているように感じ少し違和感を覚える。「耳は、最初検査に行ったときはダメだったけど、次に行ったときはまゝまゝ良くて、3回目のときは、ずいぶん聞こえるような感じだった。」〈メガネは、まだかけてないんだ?〉「お母さんには内緒だけど、婆ちゃんがめがねを作ってくれた。眼鏡屋さんで調べたら、『ずいぶん悪くなっているようですね。』ということで、『だったらお母さんに内緒で、メガネを持っていきなさい』って婆ちゃんがいってくれて、めがねを作ってくれた。」「いとこのお母さんは、授業のときだけメガネをかけて普段ははずせばいいっていているけど私もそう思う。」とメガネをかけられないことに強い不満を感じている様子。〈遠くを見たらだんだん目がよくなるっていうけど、どうだろうね?良くならないかな?〉いう SC の問いかけに対し、「私の家は(目の前が)山に囲まれているので。」ときっぱりと否定した。

〈お父さんお母さんと話とかする?〉「お母さんとはまゝ話す。お父さんとは、少しだけ話す。」「お母さんにはめがねかけてもいい?って聞いたけど、すぐに『だめ』といわれた。」〈じゃあ最近何か気になることある?〉「最近勉強(成績)が気になる。算数が一番よくない。」「席替えで、くじ引きのチャンスがないのでいやだ。」〈目が悪いから座席も変わらないんだ。それって気分が変わらないからいやだねえ。〉〈じゃあどうなりたい?〉「自分としてはもっとみえるようになりたい。」〈メガネとかかかきたいのかな?〉「前、お母さんにめがねかけていいか聞いたとき、ダメとすぐ断られ、ガクッときた。お父さんに聞いたら、『めがねに頼っていたら見えなくなる』と怒られた。悪いことやしちゃいけないことをしたのなら、怒られてもいいけど。お父さんやお母さんはすぐに怒る。『また信じてくれない』んだと思うと悲しい気分になる。」〈でもお婆ちゃんとかわかってくれるんじゃない?〉ということばに対して「婆ちゃんが一番わかってくれる。」とすぐに答えた。〈最近学校楽しい?何か困っていない?困ったことがあったら私でよければ聞いてあげるけど?〉「最近、視力を測るのがいや。何になる(結果が)のがわかってて測るのはいやな気分。」と少し悲しげな表情でいう。「みんなと合わせたい(めがねをかけないで済むのならかけないという感じか?)という気持ちがある。でも……」約40分で面接を終了。

\*話の内容がうそか本当か迷う部分があり、よく見極められなかった。ただ、理屈はすぐに出てくるので、その辺で信憑性が出てくる感じはした。話はとてもスムーズにするし、一見つじつまが揃っているようにも聞こえる。すらすら答えるのでちょっとあっけにとられた。話を聞いてほしいという感じが伝わってきた。

\*一番の思いは、周囲の人(特に大人)が信用してくれていないという不満なのではないか?少々の視力の低下は事実かもしれないが、それをきっかけにいろんな言葉をかけてほしかった(心配してほしかった)のかもしれませんが、すぐに怒られるような感じで注意されるので、いやだという思いが強くなっているようにも感じた。特に、「自分が信用されていない」という思いを強く抱いており、その反動か、祖父母が全面的に理解してくれることに甘える傾向もうかがえた。

\*「目が見えにくって不便だったよね」という問いかけににっこりとうなずいたのが最も印象的であった。初めてわかってもらえたって感じで、にっこりとうなずく表情を見たとき、目が見えないことの真偽は別として、こどもをいたわる気持ちや理解する気持ちが十分に伝わっていないのではないかという感じがした。子どもの感じ方と親の感じ方の、いわゆる意識のずれが少し気になった。

\*今後については、担任の先生が一番話しやすいということでしたので、これからは担任の先生を中心に必要に応じて CL と関係を継続することとする。めがねの使用については、保健室

の先生から『めがねをつかったほうがいい』と伝えてほしいということだった（SC が親に伝えたら怒られるからということだった）が、保護者の意向は意向として次回の面談の際に確認した上で、対応を考えることとする。

③ 3回目面談（H17.10）母親に実施。以下「 」は母親Bのことば、『 』は SC のことば。

1週間前に実施した女兒の面接を振り返り、いくつか女兒の思いについて伝えると、自分も良くなかったと冷静に受け止めていた。「私も、よくなかったんですよ。最近はずっと怒ってばかりで、がみがみ言ってばかりでした。」〈小さい頃入院していた頃の話をしてAはうれしそうに話してましたけど〉「そうなんです。原因不明の病気で、ある病院に長い間入院してたんですよ。今ではこんなに大きくなったから想像もつかないと思いますけど。そのときは、すべてのことをA中心に考えてました。不安で仕方なくて、つい甘やかしていたんだと思います。」〈あの頃に比べて、最近はAと接することは少なくなりましたか？〉「はい。小学校に入学してからは、病気も良くなって、そして下のこどもに手がかかったんで、しばらくは下のこどもの世話に追われていました。最近、上の子〈長男〉が反抗期でこっちにばかり手がかかってしまって。それじゃいけないって、この前先生に面接してもらってわかったんですけど。」「でも、それに気づいてから、何となく接し方が変わったんでしょね、随分とAが私に自分から接してくるようになりました。自分としては何も変わらないと思うんですけど、何か変わったんでしょね。」〈そうでしょうね。態度だけでなく、ことばやまなざし、などいろんなことが少しずつ変わって、それが娘さんに伝わったんじゃないでしょうか。うれしかったでしょう？〉「はい、小さい頃（入院していた頃）を思い出して、何だか優しい気持ちで接していたように思います。この子、手がかからないから、私たちが甘えていたんですよ、きっと。」と涙ぐんで語る。〈でも今お母様がこうやってきちんと振り返りができて、それだけじゃなくて、自分の態度も変えることができたってことはAさんにとっては、一番うれしいことだし、お母様にとってもうれしかったことでしょう。こういったことをいくつか重ねていけば、何かいい変化をAに与えることができるかもしれませんね。〉という、「ありがとうございます。」とうなずく。「先生と話して、何だか不思議な感じで胸がすっとしたんですよ。うまくいえないけど、すっとしたんです。自分でも何となく気になっていたんでしょね。自分がいけないとか、自分が変わらなきゃってわかっていたんでしょね。」「こどもに対して、ことばを発したり行動に移るときに、一呼吸おくことができるようになったのが一番自分で変わったところだと思います」「買い物でも、散歩でも一緒に行こうって思うし、それをAに伝えると喜んでついてくるから、最近ではこどものほうから自分に近づいてくるようになった。」とうれしそうに話す。近々大きな病院で検査があるので、それも気になるけど、それより、今は娘のことをなるべく考えてあげたい、という。

前回の面接ででてきた祖父母については、「祖父母については、どこか私の中で許せないって部分があって、今も実はいろんな面でぶつかってます。特に昔は祖父母が甘やかしているって感じがしてそれが許せなかったんです。でも今は、それがあんまり気にならなくなりました。娘が最近私の所にくるようになったせいもあるかもしれませんが、今はあまり気になりません。」と冷静に振り返っていた。メガネについては、〈恐らく、Aがメガネをかけることにこだわることは、ご両親にとにかく「自分を振り向いてほしい、わかってほしい」というメッセージなんだと思います。だから、「メガネをかけたい」っていったときも、最初から拒否するんじゃなくて、どんな気持ちなのかを受け止めながら、メガネの使い方については、医師や眼鏡屋さんのアドバイスももらいながら、一緒にルールをきめて使うということも考えてはどうですか？〉と提案し

たところ、「わかりました、そうしてみます。」と笑顔で返事をしてくれる。近々、大きな病院で眼と耳の検診があるらしいので、それを踏まえてまた一緒に考えることで、2週間後に面接を予約して終了する。

\* 母親の落ち着きがこどもに確実に好影響を与えていることがわかる。

\* 接し方についていくつか提案をしたが、とても前向きで、表情が生き生きとしていることがわかる。

\* 時々、母親が自分自身を責める傾向になるときは、それを和らげるようなことばかけを意識して試みた。

④ 4回目面談 (H17.10) 母親と面接を行う。以下「 」は母親のことば、〈 〉は SC のことば。

当初は、女兒の面接も実施する計画もあったが、この女兒が嘘をつかなくなったことがきっかけで友人関係も安定し、宿題の内容も随分と改善されたり、欠席がなくなったということもあり、担任との話し合いでしばらくは母親の面接を中心に行うことを確認する。

「この前の検査では、視力検査が随分良くなっていました。聴力検査では本人だけではなく、お医者さんも全く問題ないっていうんですよ。」と開口一番に伝える。「ほっとして涙がでました。」これまで数年間にわたって悩み苦しんできた問題に明るい兆しが見えたことで、自分自身の気持ちも大きな変化を感じているようである。何が悪いのかと考えたとき、まずはこどもの中にその原因を探ろうとする親は少なくないが、なかなか自分の中にその原因を探ろうとする親は少ない。自分の接し方を、幼稚園の頃までにさかのぼって振り返り、夫婦で随分と話をし、そして自分なりに何が足りないかを考え、そして面接で確認しながらやってみる。ことばで書くと容易に見えるが、実際やってみるととても大変であることは想像がつくのであるが、今の心の落ち着きがこどもに好影響を与えていることは間違いない。「不思議ですよ。この数ヶ月でこんなよくなるなんて。ひょっとしたら私はそれまでどこか諦めてたかもしれないし、それがこどもに伝わっていたかもしれませんよね。こどもを疑っていたのも、やっぱりそうだったのかもしれません。」「前回の接し方のアドバイスを受けて、いくつかやってみたら、こどもの表情が生き生きしてきたんです。自分も生き生きしていることに気がついたんです。逆に、これまでのギスギスした接し方を振り返ると申し訳なかったという思いでいっぱいになりました。」〈でも私も、SCとしてだけではなく一人の親として、いろんな失敗をしながら、反省しながら生きていますよ。良く私は娘に怒られるんですよ。〉という「でも先生の娘さんはちゃんと伝えるからえらいですよ。」というので〈そうなんです。だから私も娘に感謝しているんですよ。〉と伝えると、「そう、その感謝っていう気持ちがこどもに対してはなかったんですよ。～してあげている、っていう一方的な思いはあっても、感謝っていうきもちはなかったんですよ。だから、こうやって娘が眼が見えるようになったり、耳が聞こえるようになったことだけでうれしいんですよ。娘に対してありがとうって言いたいんですよ。」この日の面接の大部分は、このような感謝のことばで埋め尽くされた。「SC の先生と面談するとすっきりするので、今後も継続して面談をしてほしい。」との申し出があったので、その後、11月にも母親の面談を実施した。

\* こどもの思いについて、本当に自身とこどもを置き換えて、想像することができるようになってきたように思われる。自分の発することばの意味、与える影響、そのことをイメージすることができるので、一言一言を大事に話せるようになったようである。

\* また、それでもこどもを傷つけるような態度をとることがあったようだが、そんなときに、すぐに謝ったり、ことばでうまく説明をしておいたり、と「修正」がその場でできるようになっ



たようである。

\*「ごめんなさい」「ありがとう」「うれしい」こういった、感情を上手に表現し、素直にこどもに伝えることが、今の家族関係の中で行われている家庭はなかなか少なくないのではないか。「感謝」という当たり前のことに、改めたこと。母親がそのことの意味に気づいたことが、母親の一番の成長した点であり、こどもとの関係を飛躍的に改善に導いた要因だと考える。

⑤ 5回目面談実施(H17.11) 母親に実施。

女兒については相変わらず落ち着いて学校生活を送っているという報告があった。周囲の友人も、「どうして最近Aは嘘つかないんだろうね?」と最初のうちは話していたようであるが、最近ではそんな話題もなくなるくらいに、クラスに溶け込んでいるという報告である。

「先生にいろいろ話せたことは随分私にとってプラスでした。それまでいっぱい溜まっていたんでしょうね、私も。いろんな人から自分を責められているような気がして、きつくて自分も娘のことをちゃんと見ていなかったと思います。」

「メガネは、結局授業のときだけかけさせています。随分良くなったんですけど、やはりかけたいていうので。でも『かけていいよ』って言ったとき、娘がすごく喜んだんです。その笑顔を見たら、いろんなことが気にならなくなりました。」といいながら、こどもの気持ちを、こどもの立場になって感じることを意味を実感しているように感じた。面接は今後も不定期に継続予定である。

\*「めがねをかけたい」というこどものこだわりに対して、「めがねをかけたらだめ、かえって悪くなる」とこだわりで対応していたのであるが、その親のこだわりは、一般論的な理屈であり、そのこどもに特有の理由としては成立していない。これまでは、そういったずれがあっても、そのずれを修正しないまま、親の一方的な論理で説き伏せていたのであるが、今回はこどもにきちんと納得させるだけの話し方・コミュニケーションで、お互いの主張歩み寄りができている。何より、こどもの笑顔の意味を、十分母親が理解し受け止めていることが大きな成長であると感じた。笑顔という、ことばのないメッセージにも、重要なメッセージが隠されているのであるが、「(嘘と)疑わないでくれてありがとう」そんなメッセージをきちんと感じ取れた母親の感受性が、とても娘の感情表現の表出にも影響を与えている。

\*めがねをかけるという表層の行為の部分だけでなく、「めがねをかけたときの(こどもの)気持ち」まで想像ができたことは、こどもの自尊心の中心に触れることができたのではないかと思う。

(㊦)まとめ こどもの気持ちを受け止めるということの難しさを再認識したケースであった。母親が安定すると、他の家族にもプラスの効果をもたらし、母親の状態はダイナミックに好転していった。

今回の面接においては、当初は、CLを女兒としてスタートしたのであるが、親子の面接をそれぞれ1回終了した段階で、主たる対象を母親におき、カウンセリングを展開した。いわばクライアントが変わったともいえる状況ではあったが、家族療法的なアプローチを行うことで、問題を解決に導きえたケースといえる。

家族療法とは、問題児や患者・クライアントを、家族という全体の一部として眺める視点からカウンセリングをする療法であり、家族それ自体が病んでいる、家族システムが機能不全に陥っている状態だと、最も感受性の強い者が問題行動を起こす、と考える心理療法である。家族療法のカウンセリングでは、家族そのものをその対象とし、カウンセラーは、家族システムに変化を起こすよう、積極的に能動的に介入するのであるが、その家族の協力が不可欠になってくる。そ

の際、どこまでカウンセラーが家族から信頼を得ることが出来るかが鍵を握るのであるが、今回のケースにおいては、母親を主たる対象としたことによって、結果として家族との間にラポールが十分に形成され、家族内において、そのシステムに大きな改善がみられたということができる。

今回のケースにおいては、母親と娘の関係だけではなく、祖父母と母親の関係、また CL である長女と他の兄弟の関係、父親の家族への関わりなど、さまざまな問題点が浮き彫りになった。母親がその中心にあって、自己を振り返りながらも、他者への関係を改善すべく、話し合いをしたり、接し方を変えることで、1つ1つの歯車がかみ合って、結果として家族関係の変容が女兒の改善をもたらしたといえる。家族関係の中で子どもに問題が生じることも多いのは事実であるが、子どもの問題の解決に一番力になるのも家族なのだということも感じた。

## 5. おわり

今回のケースを通してわかったことは、小学校においては、まだまだ保護者の言動が子どもたちに大きな影響を与える場合が多いということであり、そういう意味においては、学校の現場において、問題行動が発生した場合、単にその生徒の問題としてとらえるだけでなく、その生徒の家族が抱えた問題がないのかという視点から、家族に対するアプローチをさまざまな形で行うことがとても重要だということである。

スクールカウンセラーとして心がけたことは、その生徒だけではなく、その生徒の保護者までをカウンセリングの対象として理解することで、小学校という現場において担任の教師が問題と感じている領域にさまざまなヒントを見出すことである。そのヒントを、親子と一緒に、あるいは、そこに教師も一緒に見たり考えることで、新たな親子関係や教師と生徒の関係が生まれてくる。そういった意味では、今回の事例はA家族だけでなく、担任のC先生にも大きな影響をもたらした。それまで、さまざまな問題行動がクラスで起こるたびに、その行動にだけ着目し注意をしてきたということであるが、今回のケースを通じて、教師として「こどもの気持ちになって考える」ことを学んだという。今回のようなケースであれば、教師の目から見たら、「嘘をつく」という問題行動だけに終始してしまいがちであるが、なぜそのこどもが嘘をつきたくなったのか、眼が見えないとしたらどんな気持ちなのか、こどもの感じている思いを共感できたら、「今この子はどんなことばを待っているのか？」ということを感じ取れるようになる。そんなときに、その望んだことばが出てきたら子どもたちはやはり、うれしいし、ほっとするし、信頼感が増すということで、大きな影響を与えるのであるが、今回のケースを通じて、Aだけでなく、自分のクラスのすべての生徒のことをもう一度知りたい、子どもたちの気持ちをわかりたいという気持ちから、他の教師の協力も得て、全員の面談を実施した。そして、その中で、それまで気になっていた児童の何人かについて、いろいろと悩んだりしている実態がわかり、SC とともに引き続き、面接を行うことで早期の発見や対応ができ、問題化する事を防ぐことができた。日頃から生徒のことを注意深く観察していた担任の先生だからこそ、感じた部分もあるが、Aの相談のケースは、担任教師の意識変化をもたらしたともいえる。

小学校におけるスクールカウンセリングの手法については、さまざまな工夫が必要であるが、保護者との連携をどう充実するかについては、今後とも、いろんな家族と出会い、その家族の在り方について研究を深めて生きたい。そしてその家族療法的なカウンセリングが教師にいかなる変化をもたらすかについては、次の課題としたい。